
ふあみの生き方

ふあみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふあみの生き方

【Zコード】

Z8527A

【作者名】

ふあみ

【あらすじ】

プツと吹き出す笑いを織り交ぜながら日々の生活を綴っていきます。暇つぶし程度に読んでみて下さい。基本的にノンフィクションですが演出上の脚色はしております。各話で繋がりは、あまりないで好きな話から読んでもOKです。だんだん、文体変わってきますが気にしないで下さい。誤字・脱字は寛容な精神で

第一次コンビニ戦争 ふあみ編

もう飽き飽きなんだよ！

毎日同じ繰り返し…

俺の人生にピリッと辛いスペースを加えていくぜ

7月20日

ふあみコンビニに参る！…俺は友達と一緒にコンビニで刺激的な時間過ごした。友達は俺の生き様をムービーにおさめる係り。そして俺はファミリーマートの制服を来てローソンに殴り込むのだ…

あっちから見ればライバル店の制服を来た俺は邪悪そのものだろう…俺には一抹の不安があった。アウエーで一人きりの闘い…そして何よりファミマの数百という店舗…その下で働く何千という社員やバイターの期待を背負っているのだ…

極度のプレッシャー…

しかし…くじける訳にはいかない！俺はローソンの重たく無機質なD○O○Rを開けた…

「いらっしゃいませ！」

俺はローソンの怖さを思い知られた…

一先ず光に慣れてない目を襲う蛍光灯の光！瞳孔が一瞬にして縮こまつた…

そしてライバル店の回し者の俺を満面の微笑みで向かえ入れた…

「あれ！？惚れちゃった…俺に」
……はつ！ローソンに一瞬呑まれた…つか可愛いローソンのバイ
ターの微笑マジックにかかつたと言うのが正しい…
あちらは一枚も三枚も上手…やんかあ！脂汗が出た…
思いもよらない紙一重の攻防…しつかし！俺の脳裏にマネージャー
の一言が蘇る…

「お疲れ様！なら次のシフトは金曜だね」

あれがマネージャーの精一杯のエールだったのだろう…俺…やつて
みせます！見てて下さい！

あっ…その前に…おトイレ
行きたいちゃ

ザアア…

すつきり！したところで…俺は店内を見回した。俺は品だし途中の
お菓子を発見した…

作戦その壱→撃乱作戦

俺はそのお菓子を…

「ライバル店の人間だけど俺…品だし得意だからやつとくよ
みたいなノリで お菓子を棚に並べた。

そして撃乱作戦の核となる嫌がらせ行為に移った…
お菓子の表裏を逆にする。まだ序ノ口…カール・ポリンキー・カ
ルの

「あれ？並びおかしい…」

作戦 お客様がカール一個お買い上げになられた場合 一方方はポリ

ンキーなんですよ 笑〃

まさにお菓子の地雷である！手を伸ばしたら即死ですわ！

「おー！ムービーの時間ねえから早くしろ！」

なぬ！？俺の隠密行動はタイムリミットを迎えていた…俺は最後の任務にとりかかった…

ゆっくり歩き出し…ガムを一つとる…あの～十円ガムじゃないからね！そこは気をつけて そしてレジにガムを置いた…

今まさにレジを挟みローソンバーカフェアミマの構図が出来上がった。俺は彼女の目をしつかり見据え… あつ彼女の瞳に僕がいるうー恥

ずかしい

…彼女に俺は言つてやつた。

「俺と付き合えない？」

他社とか関係ない！

愛はノー ボーダーだろ！？

答えへは…

「あのーごめ…

「ムービー終わつたぞ…！」 友達は彼女の声にかぶるくらいの馬鹿でかい声で言った…

ありがとう…友よ…

こうして俺の挑戦は幕を閉じた…

ファミレスに参る！恵輔編

僕の名前は恵輔。今回、ふあみの付き添いでファミレスに来た。ふあみが言つには、

「このファミレスで刺激的でエキゾチックな夜が過ごせるらしい…心は高ぶるばかりだ！」

僕ら一人は家から数分の場所のビックボーイに向かつた。ふあみはなぜか空手着なのが気になる…ビックボーイに着くと、ふあみが

「俺は出来る！出来る！ヒッヒッフウー…」

何こいつ…気色悪い…

僕はふあみを置いて店に入った。「いらっしゃいませ！何名様ですか？」

「一人です。喫煙席でお願いします。」

「それではご案内します」

僕は席につくと煙草をふかした…………あれ？ふあみ入ってこない…席を立ち外に目をやると…ふあみは駐車場で…ヤンキーに絡まれていた…だが、ふあみがファイティングポーズをとるとヤンキーはたじろいだ。そりや空手着だからしがない。でも、ふあみは空手なんてやつたことない…

ヤンキーに殺される…ヤンキーは三人。男二人に女一人の構成だ。

…男二人に女一人…僕は、いけない妄想をしてしまいズボンが盛り上がった…

ふあみを見ると…

ふあみも盛り上がつていた…

ふあみは攻撃に出た！

「お前ら今まで何してた！卑猥なこと二人でやつてたんだろ！そりやお腹も空くわなー！そんでもガツツリ喰おうってか！？」

うまい心理作戦だ！相手の精神を揺さぶる効果的な言葉だ。

しかしヤンキー達のボルテージを上げる結果になり…ふあみはくちやくちやこされてしまった。ヤンキーにボコボコ…ヤンボコ…ヤン母…ヤンキー母校に帰る…なんちやつて

ふあみは地面に頭を擦りつけ謝った。

ヤンキー様一行も許した様子で去つて行つた。

ふあみは痛々しい顔で店内に入つてきた。僕は親指を立てGOOD!!サインをして彼の頑張りを褒めた。

当初の目的が曇りかけている…ふあみも眞の目的を果たす力が無さそうだったので今日は後ろ髪をひかれる思いで店をあとにしたのだった…

グリルチキン食べたかったなあ…

「アミレスに参る! 恵輔編 (後書き)

ふあみ編に続く

「アミノ酸で參る！ ふあみ編（前書き）

見たら評價して下さるよ…

ファミレスに参る！ ふあみ編

俺は後日改めてファミレススピックボーイに向かつた。今日は普通の私服。何事もなく入店できた。

でも…疼く何か仕出かしたい…おもむろに手がガムシロップに伸びる。一つのガムシロを田元まで持つていき…頬と眉の部分で挟んだ。

例えるならガムシロ仮面！

俺はその状態で後ろの席の女の子一人に笑いかけた。

視界がガムシロで塞がれているので女の子の反応が見れないのが辛い…

「あつ…お、お待たせしました。ポテト…なります」

この娘いい反応…

「ありがとうござります」

俺は目からガムシロを外し今日の真の目的に頭を巡らした。俺は店員を舐めるように一人ずつ見ていった…

⋮

⋮

あれかあ！俺は肉を焼く一人の男を凝視した。

話は変わり…俺には気になる女の子がいる。その子は今フリーなのだが。その子の元カレがここでバイトしていると聞き駆け付けたのだ。なぜ元カレを見にわざわざ来たか？というと、その子はかなりのBセンラしい…その真意を確かめに来たのだ！

俺はその肉を焼く男に嫉妬の炎をメラメラ燃やし近づいた……

俺はドリンクバーでジュースを注ぎながら男の名札をみた…

【吉村友樹】
「僕が肉を焼いています！」

名前が一致した

う…
でか何このギャラリー…たぶんこの店舗しかやつてないたゞ

俺は恐る恐る顔に視線を流した。…

帰り際やつのチャリをグチャグチャにしたのは言つまでもない……

ふぁみの恋【一】（前書き）

今回も特に「メモトヤ」ではあります…しかし無修正のホントの話です

ふあみの恋【1】

俺の気になる人の話を前回少しした。

今回は恋の行方を書いていきたい。彼女の名前はエセと書いておこう。彼女との出会いは鮮烈だった。

俺は高校最後の夏休み前に彼女がいないことに焦りを感じていた…

そんな時、俺に天使（墮天使？）が舞い降りた…

ある日エちゃんにいきなりアドレスを頂いたのだ！

エちゃんとは、この時が初対面で

「なんで？」

と思つた。

エちゃんとは、その日からメールを始めた。エちゃんが言つには学校で俺を見て好きになつてくれたらしい。

俺はエちゃんと一緒に帰つたりして…恋されたはずが俺がエちゃんに恋しちつたのだ…

前回のファミレスの話は、この頃である。

俺はなかなか告つてこないエちゃんに歯痒さを感じ結局俺からアプローチした。

その結果、見事にカップル成立した

俺の夏は例年より騒々しい日が続くはずであー

確かに騒々しい日が続いた…悪い意味で

前々から工ちゃんの恋愛は聞いていた…しかし過去の事は関係ない
!と目を背けていた…

工ちゃんは16歳にして7人と付き合つていて俺は8人目らしい…

まあ気にすんな俺

工ちゃんは俺が

「股したことある?」

の質問に…無言…たぶん股経験有り…まあ気にすんな俺

俺は軽く見ていた…

甘い罠に身を沈ませていくのに気がついていなかつた…

工ちゃんは何度か俺を不安にさせる行動をとつた…

例えば朝10時にメールが来て返信すると…メールが返つってきたのは夜11時で内容は

「「めん!遅れたッ…眠い(˘ ˘) ～～～おやすみ～」

おい!なめどんのか!遅れたって12時間以上経つとるやんけ!!
大遅刻じや!

しかも寝るとはなんぞや!全く言葉のキヤツチボールできちねえやんけ!なんやこの一方通行!

ふつースツッキリ

このレベルの

「有り得ないんですけどお

行動を工ちゃんは多発させた……

一部に続く

ふあみの恋【2】

夏も終わりに近づき友達一人が家に来た。

友達1（久江）が言つた。

「今日はエちゃんについての話があるんやけど…」

嫌な予感…

「えつ？ それはへこむ話？」

「うーん…まあまあやね…でも救いはあると思うよ」
だが友達2（北川）が言いやがつた…

「いや…俺は救いはないと思う」

俺は話を聞く前にドカーンとへこんだ。

「心の準備が出来てから聞いていい？」

「いいよ」

俺は頭をフル回転させて考えた。日頃から不安に思うことはたくさんあつたし…まさかとは思つたが…そのまさか…うわきかあ！？
俺は聞く勇気が出ずなかなか聞けなかつた…
だが聞くべきことだし聞かないと何も始まらない。

俺は決心した…

「さあ話せよーほりー言つてみろよー」

「じゃあ言つよ…エちゃんとこつから付き合つてる？」

「夏休みの少し前ぐらー…」

「…夏休み始まつてすぐの話やけど俺の後輩がバスから男と手を組んで降りてくるエちゃんを見たらし…」

「…」

はいーアウト それは人としてしてはいけないこと…浮気じゃないですかあ まさか見間違いはないはずだ…

俺は高速電話した…

今までの鬱憤も晴らす氣で電話したが言いたいことはほぼ言えなかつた。エちゃんは否定したが信じることはできなかつた。俺は一先

ず落ち着いてから会って話そうと言つて電話を切つた。電話越しに泣いている感じが分かつたが、それさえも嘘に思え虚しくなつた。俺は一二三日で落ち着きを取り戻し会つて話し合つことに決めた

ふあみの恋【3】（前書き）

期待禁止

ふあみの恋【۳】

ピンポーン！

彼女が来たようだ。俺は胸をドキドキさせながら玄関に向かった。
彼女は神妙な面持ちで立っている。彼女を部屋に迎え入れ静かに腰
を降ろした。

俺は言う機会を伺つたが、なかなか言い出せない。

煙草を吸つたり…

テレビをみたり…

で30分経過。しかも無言。なんか時間が経つにつれて言い出しが
くさ倍増してきた…つか彼女から話切り出してくれないかなーと
淡い期待をしていた。その時…！！

「私のこと信じないの？」

「信じたいけどエちゃんの田頃の行動を見ると…
言葉を濁した俺。

「田頃の行動ってなにー？」

：そこで田頃の不満『エちゃんの許せない行動7箇条』をぶちまけ
た！！

7箇条の内容は伏せせる」と言います。

…

…

…

エちゃんは俺の総攻撃でボロッボロッになつた。ざまあみろー。

「話戻すけどホントに浮氣してないんやね？」

「うん」

俺はエちゃんが大好きだ…だからエちゃんが浮氣していない…って言
うなら信じることにした。

「俺はエちゃんを信じる」

翌日。俺は友達に付き合つていくことにしたと伝えた。友達一人は
「俺はエちゃんのこと信用できんけどふあみが付き合つていくつて
決めたならいいと思う」
「俺はふあみが心配でしようがない」
と厳しい意見を頂いた。
これからもエちゃんには振り回されるだろうが友達一人に助けても
らいながら頑張ろうと決意した。
数日後、俺の頭を悩ませることが、また起きた。……また、それは
別の話……

恋は走り始めたばかり

チャーリー（前書き）

トックランナー…時速6キロ…

チャリ通団！

強い日差しに暖められたアスファルトが放射熱を撒き散らす……俺はウザつたい空気を切り裂くようにチャリをマジこぎする。俺の頬に伝つ汗は風にとけていく。風景は高速で俺の横を通り過ぎる。いつもは静止した世界が躍動的に動き出す。……

みたいなー今日この頃！？

俺の友（愛機）の名はトップランナーー名前に似合わず推進力は抜群に低い。

俺はトップランナー略してトラちゃんに乗つた。向かう場所はただ一つ。

南である。俺は南に進路をとり進み始めた。

だが問題が発生した……南ってどっち？

……なんとなく南っぽい感じの方に進むことにした。

今回はかなりアバウトな旅なのでルールを決めた。

- 1 - チャリ以外の交通手段をとらない。
- 2 - メットは被る。原則、蛍光テープが貼つてあるものに限る。
- 3 - 南っぽいものを見つけたら写メをする。

以上である。

「なんか俺一人だと心細い……」

俺は友達のスカルを誘うことにしてた。スカルって奴は骸骨みたいだから俺がスカルと名付けた。しゃれこうべと迷つたが、カッコよさ

重視でスカルとなつた。

スカルの家に到着！

俺はチャイムを高速で12連打した。スカルが2階から顔を出した。

「今から、あてのない旅に出ようぜ！」

「うん」

ごく普通なノリのスカルに少し動搖したが…彼はノリノリだった…なんせライダースーツを着ていたからだ。下がスエットってのが、またイカす…

俺とスカルは、南っぽい方向に向かつて漕ぎまくつた。スカルはメットを被つてはいたがバイク用の蛍光テープが付いていなかつた。俺はルールを一つ変更した…メットなら何でもいいさ…

漕ぎ始めて2時間経過したところで、俺は俺等ふたりの走り屋の名前を付けることにした。

スカルの意見で名前は決定した！

名前は『チャリ通団』……ナウいぜ…ばかやろう…

チャリ通団二人組は

「チャリ通！ダン！」

「チャリ通！ダヤン！」

を連呼して国道を爆走していた。しかし、問題が発生した…原チャリに乗つた3人組がエンジンをバンバンにふかして、ゆっくり近付いてきた。

これは…勝負の合団だ！

俺達は相手がスピードにのつていないうちに爆走した。

シャカシャカ！

ブーーーン！！！

原チャリの奴らも少しずつ追い上げて来た。しかし、あほう原チャリ三人組はコンビニに入つて行つた。俺は叫んだ。

「早々にピットインか！？この勝負もらつたぜ！」

シャカシャカ！シャカシャカ！ガシャ…バーン！

俺のトラちゃんのチョーンが勢いよく外れ俺はアスファルトに全身をこすりつけた…

俺は…あまりの痛みに泣いてしまつた…ワンワン泣いた…涙が枯れるくらい泣いた。泣きすぎてヒックヒックなつて息が出来なくなつた…

スカルに田で助けを求めた。

スカルは

「泣くなよ、お前に涙は似合わない…」

俺はスルーして泣いた。

自転車は、いたる所からギギッと変な音がした。

俺は泣きながら自転車を押して帰つた。

後ろから小さい声で

「チャリ通団…チャリ通団…」

と聞こえてきた。スカルのヤロウ！俺は何故か無性に腹が立つた。

俺は勢いよく後ろを向いた…

パシヤ！

「記念に写メとつておいたから

俺はルールを、もう一つ変更した。写メは記念になつたら何でも撮
ればいいさ…

チャリ通園ー（後書き）

涙流して糞流れひづ...

万引きGメン（前書き）

社団法人 万引きGメン...

万引きGメン

万引きは犯罪です。私たち万引きGメンは万引きを許しません！

俺とスカルは暇を持て余し某大型スーパーに行くことになった。

目的は一つ……試食だ！

「おい！ふあみ、あつた あつた 」

「あれは！試食の王道… ウインナーじゃないの！」

みたいな感じで俺たちは店内を練り歩き、今日の夕食を済ませた。

「じゃあ食後のワインでも、いくか？」
俺はワインの試飲を見て言った。

「おい！ふあみ！あいつ…」

「なんだよ！早くワイーンを…」

俺は、スカルが指差している方を見た。そこには、

学生服を着て大きな鞄を持つた高校2年生くらいの男の子がいた。

精肉コーナーの前に…

怪しい…怪しそう…

俺たちは、直感で万引きだと考えた…

スカルが言った。

「万引きGメン…出動…！」

「イエツサア…！」

彼は、何かを買つわけでもなく雑貨やお菓子コーナーをウロチョロした。

しかも周りを気にするようにキヨロキヨロしている…

俺たち心の中で、彼は容疑者から犯罪者に代わつていった。

奴は必ず犯行を犯す…

私たちが彼を救わなければ…真つ当な人間にしなければ…

その思いが私たち万引きGメンを、つき動かした！

強い思いは表情にまで表れた…アゴが、しゃくれてしまつ…

スカルは言った。

「犯罪は未然に防ぐ…」

スカルは彼に近付いていった。俺は、待機しスカルを見守った。スカルは彼に近付づくと

「万引きは犯罪なんだよな… そなななんだよな… やつてはいけないことだよな… なんだかな…」

と彼にギリギリ聞こえる小さな声でブツブツと言いく出した。

スカルの思いが届いたのか彼は逃げるよつて2階に上がつて行つた。

俺たちは彼を追う！しかし彼は歩くスピード早く撒かれてしまった… ヤバイ！このままでは、彼が犯罪を犯してしま…俺たちは一手

に別れ彼を追つた！

なんと、JJJでスーパーの万引きGメン（本物）も彼を追つていたらしくコニーフォーム姿の2人が2階に上がってきた！

例えるなら共同戦線だ。

俺はプッシュシートトークを使いスカルと通信した。

「こちら、ふあみ！目標は確認できず…ビッグゼー…」

「えーこちらスカル。同じくだ！」

リアル万引きGメンの方々も見失つたらしく足を止め無線で何か話していた。

俺たちは、隅々まで歩き彼を捜した。……………と、その時…遠く彼の姿を発見！俺は、無意識に叫んでいた…

「お前は困まれた！逃げ場はないぞ――――――！」

それきり彼を発見することはなく俺たちは諦めて帰ることにした。

帰り道スカルは言った。

「彼さあ。よく考えたら向かいの家の子…」

俺たちは彼の家に向かった…あんパンと牛乳を持って…

万引きGメン（後書き）

張り込み開始！！

保育園のおはなちっ！

俺の保育園時代は一言でいうと…
スカートめぐり！
の毎日だった…

田々、パンツを見るべくスカートを揺らしていた。
たぶん、クレヨン shinちゃんより変態だつただろう…

日が経つにつれて年上のスカートにまで手を出し始めた俺を止める
者はいなかつた！

しつかしーーーにきて、鎮静化していた各派閥が動き出したのだ！

俺は自分の派閥を守るべくスカートめぐりを中断し、
派閥同士の醜い争いに身を投じた！

俺の派閥はなんとか生き残り最後の闘いがやつてきた！

「いいかあーふあみーこの闘いに勝つた方が、我らの保育園の統帥
といふことでいいなー？」

「ああ…」

相手の派閥のボスはアツキ…アツキは負けん気の強さは抜群で形勢
を一気にひっくり返すパワーを持つていた！

俺は走り出した！その時、横目に我が愛しき人シオリちゃんが見え
た！

「シオリちゃんにいいところを見せるぜえ！」

俺は十分に助走し、とび蹴りを放つた！

アツキの配下の黄土色くんが吹っ飛んだ！

俺はアツキの前まで走り込み右ストレートを放つた……

「までしか記憶ないんだよね～」

俺はシオリちゃんに久しぶりに再会し喫茶店で話をしていた。

「つか、そんな子供喧嘩なんて覚えてないけどーー一つ言えるのは……ふあみくんのスカートめくりは酷かつた！つか保育園児にしてド変態だよ！私、ふあみくんのこと大嫌いだつたもん」

「……死ね！」

俺はシオリちゃんのスカートをめくった！

俺はつぐづぐ思った……シオリちゃん、随分、成長したね……グフフッ

万人にうけるコメディーとは（前書き）

新境地開拓！

万人にうける「コメティー」とは

ええーこんにちは”ふあみ”でござります。

最近の悩み…いえ前々からの悩みと言えるのですが…

「私のコメティーは人気がない！」

これは現実であり評価にも影響を及ぼし、その評価を日々チェックする私の期待を裏切り執筆意欲を大きく削ぐ結果となつたしだいですあります。

私は自作の問題点を探つてみました。そして見つけたのです。万人にうけるコメティーとは…いたつて平凡な主人公に悪さをする、どこかオチャメで掴み処のない異人達が織り成すドタバタ！

ここまで調べ上げたので実際に作つてみることにしました。

名付けて

「ふあみプレゼンツ万人にうけるコメティー」

では、どうぞ！

俺は都内の定時制高校に通う”ふあみ”

平凡な毎日を送る俺だつたがあいつが現れてから俺の毎日は地獄絵図に変わつた…

あいつは俺の家の屋根を突き破つて空から舞い降りてきた…

「これから…ここでお世話になるんこ…よろしくるんこ…」つてな感じで勝手に居候し始めやがつたんだ…

「今日の夕飯はなにるんこ？」

「今日は、るんこちゃんの大好きなハンバーグよ！さあふあみも手伝いなさい！」

何故か母親と仲良しになつてゐるし…しかも、るんこちゃんとか呼んじやつて…

つか彼女が言つには

「私、金属バットの神なのるんこ」

意味わからん…金属バットに神様がいるのか…？

まあいいや、今日は寝よー！また明日あいつを天に帰す方法を考えるか…

おやす

「ねんなや！」

グヘエ…ああーホームラン！つてなんでやねん！バットは人間打つもんじやねえぞ！

「私が寝る前に寝るなんて酷いるんこー！」

泣きたくなつてきた…

おい！作者！俺を殺す氣か！？勝手な思い付きでバットで人撲らせんな！

「うつせえなあ、オメエーの平凡な日常描いても誰も読まねえだろ！なんだつたらスパツと死んだ方がインパクトあつていいかもなあ！」グヘヘ

やばい…この作者イツてらつしやる…

この先、俺はどうすればいいんだあー！

…

……はい！どうでした？

私には、こういった部類のコメティマーの才能がないのがよくわかりました。

そして何より性に合わないとわかりました。

まあ自分のできるコメティマーを万人にうけずとも小数の私の小説を読んでくれる方々のために書いていきたいと思います。

では、またお会いしましょう！――ドス――

「なにカツコつけてんだるん」――

グフ――つか金属バット使つてんのはヤンキーと高校生球児とお前
ぐらいじゃボケ――

「生意気言つとつたらいてまうぞ――」――

ドス！ガチッ！グチヨ！ヌチャ――

あれ？喋り方恐くなつてない！？つかやつすさぎ――

はい、はい、やね。ではじゃ――

万人にうけるコメディーとは（後書き）

お疲れ様でするんこー！ご主人様！

想像して下さい。（前書き）

置きっぱだつたモノを掲載

想像して下さい。

僕のくだらない想像を共有しましょう。。。

想像してください。

肌寒くなつた秋。ススキが一面に生えた原っぱ。ススキが冷えた風で力サ力サ揺れています。空には沈みゆくオレンジ色の夕日が風景を暖かな紅に染めています。彼女はこちらに、ゆっくり振り向きます。彼女の頬が紅く染まつてるのは夕日の為か、はたまた…

想像して下さい。

30年後の貴方を…
禿げていませんか？

想像してください。

透き通る青い空にうつすらかかる白い雲。目の前に広がる群青色の海。打ち寄せる白い波が気泡をパチパチさせながら消えてゆく。視界を邪魔するものは何もなく永遠に続くかのような空と海…をラーメン屋のテレビで見ながらラーメン啜る私（小太り）。

想像して下さい。

ステーキ。香ばしい肉の焼ける臭い。黒コショウが鼻をツンとくすぐる。あなたはステーキにナイフを入れる。ステーキはナイフの刃に反発することなくスッと切れる。断面は中心部がやや赤く湯気が

のぼる。滴る肉汁がポタポタ落ちる肉をオニオンソースにつける。オニオンソースの表面にはステーキの脂がスッと円状に浮いている。ステーキを口に運ぶ。オニオンソースの酸っぱさと肉のうま味とほんのりする血の味。

ああー肉が喰いたい！！

妄想して下さい。

えびチヤン級の女性に…

「あっ！クリームついてるぞっ！」

ぺろっ

グフフフフッ…

妄想して下さい。

谷間。

ガハハッ

想像して下さい。

ゴキブリの腹…オエッ…

想像して下さい。（後書き）

「これ小説じゃねえ……」

男だつたら助けなくちや（前書き）

一話完結なんで他の話も読んでみてください。

男だつたら助けなくちゃ

小学生の頃、学校の登下校はバスだった。

ある日の帰り。

車内は、とても混み合っていた。俺は席に座る「コト」が出来ず立つハメになつた。

目的の場所まで後10分程度の場所で、ふと気付いた。

同じ年で仲のいい女の子が俺の前方にいた。そして、俺と女の子の間には一つ下の男の子がいた。

その男の子の手が女の子の「オケツ！」に触れていたのだ。

「まあでも混み合つてるし仕方ないかあ……」

なんて思つていたら……

手がパンツの中に入つていくではないか！！

俺は思つた。

「痴漢されてる……！」

男の子は小学2年生。

2年生にして……キモツ……

女の子は全く振り払う気がない。小学2年生の早過ぎる性欲の爆発を気付いてしまっているのは俺しかいなによつだ。つてコトは彼女を救えるのは俺しかいなによつだ！！がしかし、勇気がでない…

俺と女の子は同じバス停で下車する。なかなか注意できなこまゝ、バス停まで数分の所まで来ていた。

俺は勇氣を出し男の子の手を掴み「なにやつとさのー・？」「とダサダサなセリフを吐いた。

男の子はフツーに手を引き無言で前を見ていた。なんか言えーつか反省しろー！変態ー！

バス停に着き俺は女の子に聞いた。痴漢されていただらうーと。

彼女は「えつー・う」と言葉少な気に答えた。

俺は、もじやと聞いてみた。「嫌じゃなかつたの？」

彼女は言った。
「なんか気持ち良かつた。」「

……

.....
女の子とは保育園時代からの付き合いだが…確かに彼女は口をか
た
た

なんか同意の上の行為を邪魔したみたいで馬鹿らしくなったが痴漢
小学生が将来、痴漢オヤジにならない様に先生に報告した。

が、しかし先生は笑つて話を聞くだけで問題視していなかつた。

俺は、小学3年生にして
「あんな男の子を野放しにしてホントに大丈夫か？」と心底、心配
した。

まあそんな正義感の塊のような小学生が今や痴漢の常習者とは…
世知がらい世の中ですね…

嘘です！痴漢なんて絶対しませんから！――！

男だつたら助けなくちや（後書き）

痴漢する時は了承、得てからしましょ'づ。

平凡ファミレス（龍書き）

「メジャーじゃなく平凡です。」

平凡ファミレス

ハンバーグが自慢の某ファミレス。

俺を含めた4人の男達。

某漫画「THE○名様」気分で参上。

ふつーにグリルチキンを頬張る4人。

グラッセ「あの子達、可愛くね？」

まさに、お年頃の青年がよく言ついたつて平凡な質問。

グラッセは人参のような顔をしているコトから「人参のグラッセ」と呼ばれていたが省略でグラッセと言つあだ名になつた。

俺「うーん右。」

俺も、いたつて平凡な返し。

グラッセ「ふーん、俺、左。」

俺「へえー……」

グラッセ「……」

俺「……」

他一人「……」
ひたすらグリルチキン。

俺「俺ら何しに来たんだっけ?」

グラッセ「だから一飲み干すんだよ、フリドリを。」
フリドリ フリードリンク

俺「あー忘れてた。」
最近、おバカな事をやるのに疲れていた俺。クレヨン shinちゃんだ
つて大人になる時は来るのがだ。

グラッセ「でも全部は無理だなあー、メロンソーダのみ消し去るか
俺「やるだけやってみるわ。」

他の二人もテキトーに賛同。

机の上に4つのメロンソーダ。

1時間後。

ポテトをつまみに一人3杯ずつ 完飲。

なにも言わず、お茶を注いでくるグラッセ。

みんなの気持ちは同じだった。

皆、それぞれ飲みたいドリンクを取りにいった。

その後、一時間まつたりと過ごす。

もつコメディーの影も形もない。

さすがにフツーに飽きた俺。

俺「なんかしねえか?」

グラッセ「もう一回挑戦しちゃう。」

俺「えーけだる。」

グラッセ「……

俺「なんか面白こ」とねえ?」

友達C「つーん。」

友達D「……

俺「…………いやあ、店員に怒られるか怒られないかのギリギリ見極めよ。」

グラッセ「おっかーとこかく怒られないよつて凄いコトがあーいんやん?」

俺「おー。」

あみだくじにより順番決定。

グラッセ C 俺 D

「俺が、かあ

辺りを見回す人參顔。

グラッセ「よし！決めた！」

グラッセはグラスに入った氷を口にふくみフリー ドリンクコーナー

なんとなく、やることは分かつていた。

しかも、俺の予想では確実に怒られる！！

このゲームを一巡を待たずとして幕を降ろす気が！？

俺は…俺は…久々に燃えてんだぜえ――――――――――――?

二十九

平凡ファミレス2

グラッセは店員に氷をぶっかける気だ！

俺はグラッセの腕を掴んで席まで連れていった。

「おい！それはアウトだろ！」

「俺には俺の考えがあんだよ！もう座しまれちまつたじゃねえか！」

店員は、怪訝そうな顔でこっちを見ている。

「何が考えだよ、アホ！もうお前終了一次C！」

「うーん…なんか…」

「グラッセみたいにやり過ぎないようだな！」

グラッセを睨む。

グラッセは鼻をほじつている。無性に腹が立つ顔をしてやがる。

「俺、無理！できない…」

「おいーおいー冷めるじゃねえかよ…」

「まあいいや、次俺か」

天性の才能が素早く答えを導き出すと想こきや何をしたらいいか真っ白だった。

グラッセ

「お前、考えてなかつたなー！」

「うん……」

さすがに2連続パスは場をシラケさせる。悩んだ俺は、帰る間際やる…と言つて見逃してもらつた。

グラッセ

「次、D！よろしくう！」Dは、のそりと立ち上がるとソファーの上に立つた。Dはソファーの上でバッティングフォームをとるとHアーバットをフルスティングした。

「タツナミのまね」

俺はタツナミとかいうジャパニーズはアイドンノーだつたが元ベースボールクラブの彼の豪快なスティングはミスター・タツナミの凄さを伝えるには充分だつた。

「うーん！デリシャス！ミスター・タツナミー！」

D

「そんなんに喜んでくれるなんて思わなかつたな」D（愛称・チビル）のモノマネは他の客も店員も見ていなかつた様で問題なく終了した。

グラッセ

「一先ず終わつたか・ファミ以外は…」

俺は未だに良い案が浮かばず悩んでいた。

チビル

「ごめん！俺そろそろ帰んないと…」

グラッセ

「んじやあ、そろそろ解散すつか。」

やばい！時間が足りない！そろそろと席を立ち会計に向かう4人。

「ありがとうございましたー！」会計も済みグラッセがドアノブに手を掛けた瞬間だつた。

「おい！お前の番だぜ！」

忘れてなかつたか…

俺は焦つていた。

やばい！やばい！真っ白だ。焦つた俺は、とにかく真っ先に思いつ

いたことをした。

「コマネチー！」

ポージングしたまま皆の様子を伺う俺。

グラッセ

「人のネタかよ…しかも当初の目的から‘それでるから。」

レジをしていた女の子は苦笑しながら言った。

「あのー今年卒業していつた先輩方ですよね？」

俺

「…は…うい」

「やつぱりー先輩おもしろいですね！」

そう言つう女の子の目は決して笑つていなかつた…

END

平凡ファミレス2（後書き）

あれから何度か行きましたが彼女は辞めたようです。

遊園地～一枚上手な少女～（前書き）

色黒で眉毛が繋がりぎみな子でした。

遊園地～一枚上手な少女～

生憎の曇り、午後からは雨が降るらしい。憂鬱だ。とにかく、憂鬱だ。

しかも、こんなインドア日和の日に彼女と遊園地に行く予定を立ててしまった…。ああーゆーうつ。

なんとか遊園地の件が無しになるよう頑張った。

「今日、雨降るつい！」

「お金が無駄になるかもよ…。」

「こんな日は家でゆっくりだらー…？」

「延期にしよ！ね…お願い…！」

無駄だった…

【それから、ジーした…】

某遊園地到着。

蒸し暑い。早くも俺の天然パーマがぐにゅぐにゅ。

しかし、なんだかんだ言つたつて遊園地は楽しい。存分に楽しむ俺。ひとつ、気掛かりは吐きそうだと言つこと…。若かつたあの頃の、体力は何処えやら。2連続以上の絶叫系は身体が頑な拒んだ。

俺は、中年お父さん並に休憩を挟みながら絶叫マシーンを、こなし

ていった。

メール受信。

「遊園地はどうだい？」

信号機からだ。信号機とはあだ名、彼の髪には赤と緑のメッシュが入っている。黄が足りないが、そこはスルーする。

彼は俺が某遊園地に行くのを、複雑な思いでいた。その話は、また次の機会に…

絶叫し疲れた俺達は、割りと緩めのジェットコースターに乗ることにした。列に並ぶと、前に居た女の子（推定9才）が話し掛けた。

「これ怖い？」

「ブンブン頭が振られるよ！」

昔、乗った経験があるが…細かいカーブを素早く曲がるため遠心力で、ヨダレ注意！な乗り物なのだ。

「ぶえつ！－ホントに？私、一人で乗らないと…\$¥！\$後半なにを言つているか理解できない。そういうえば女の子は一人のようだ。

「じゃあ一緒に乗る？」

笑つて頷く女の子。口り好きの人に、とつては萌一な瞬間なのだろう。曖昧3センチ……

乗つている最中、女の子は終始なにかを叫んでいたが聞き取れなかつた。しかも、手摺りに歯をぶつけていた、ふつ！

女の子とは、ここでお別れだと思いきや…「もう一回乗ろー」と言い出した。俺は丁重にお断りした。女の子の元気をほんの一握りでも分けてくれたら、もう一回も可能だが…

「ねえあつち！」

スプラッシュコマウンテン系コースターが水を大量放出する橋の上を指差す女の子。俺が返事をする前に走り出していたので、泣々ついでいく…

「ここ濡れるよ！」

「じゃあここは？」

中央に移動する女の子。濡れるに決まってる。分かつて聞いているのか？

「ねえー あれ乗った？」

横回転系の飛行機型乗り物。

「乗つてないよ！」

「ぶえーつ！カップ…カップルなのに… ? ××」

ぶえつと言つた後は必ず変顔をする女の子。なんでカップル＝あれに乗る！になるのか？

「ねえねえ！これいくらだと思つ？」

質問責め…女の子は、腕時計の値段を聞いているらしい。女の子の腕にはピンクのCASIOの腕時計がしてあった。

「うーん…CASIOだし、8000円くらい？」

「ぶえーつ！8000円！」

何が？

「正解教えて！」

「うーん、1万くらいじゃない」

知らんのかい！！

「ねえーあれ乗つた？」

また、あれのつたあ？か！

女の子が指差すのはフリスビー型の横回転に縦揺れがプラスされた乗り物。

「乗つたよ！あれは気持ち悪くなるから止めた方がいいよ！」

「あれ一回転する？」

したら、みんな吐いちゃうよ…

「しないよ、あんまり乗つてないみたいだね、二人…三人か。」

ジッ…とフリスビーを見る女の子。

「ちがうよ！カップルが1、2だから4人！」

確かに、よく見ると4人。

「ホントだね。」

「カップルが2つだから4人だら。」

うん、同じことさつき言つたよね！だらーつてのは、多分愛知の方言だ。

「ねえ今、何時？」

「今ねえ……つてか時計あるじゃん！」

腕時計を見る女の子。……アナログ時計の見方が分からないらしい！なんの為の時計だよ……お飾りだね……気が付くと女の子と、ずっと話をしていて彼女をほつたらかしだった：俺は女の子に、「彼女ほつたらかしにしたから怒つたみたい：もう行くね！」と言つて、その場を離れた……

遊園地～一枚上手な少女～（後書き）

つづく

英國語～ナベドウガモツタ～（福井県）

ウニバ

遊園地へようやくきました

女の子と別れ「デート再開。

しかし、何かこの… 积然としないと云つか… 僕は、後悔していた。まだ小学生の女の子を一人残し行つてしまつたことにザイアクターを感じていた。僕は彼女に、やつぱり女の子と一緒に遊ぼう…と言つた。彼女も賛成してくれた。

女の子は、すぐ近くにいた。売店の前で財布を持ち、なにか買ひのウロウロしてゐる。僕は走つて女の子の元へ迎つた。

女の子は、びしょ濡れだつた。

俺達が去つた後、橋の上でひとつ水遊びをしていたのだろう。

「なんか一緒に乗ろうよ…」

「でも、そろそろお母さんから電話かかつてくれる。」手には携帯電話が握られてゐる。

「観覧車乗ろうよ… 観覧車なら電話でられるし…」

「ねえ…どのくらいで乾くと思つ?」

精一杯の俺の気遣いは見事にスルーされた。

「うーん、今日は曇つてるし時間かかるんじゃない?」

「ふえーっ…べトベトだ… ×£%!」

何を言つてゐるか本当に聞き取れない。

「どのくらいで、乾くかなあ? 10分? 20分?」

「…でも、いつ乾くのか気にならじい。」

「…分くらいこじやない?」

「ふえーっ、どうしよう…」

どうしようつて言つたつて… 話題を変えることにした。

「とにかく、なんか乗ろうよ…もし乗つてる最中かかつても、かけ直せばこいじやん!」

「 %£×§ „ „ 」

理解不能。もしかして自分から、かけ直せないのか？「もしかして、電話のかけ方分からない？」

「でも、服、濡れちゃってるから」

「…そうだね！濡れてるもんね…」

「先ず、合わせたが濡れてる事が今関係あるのか？」

理解不能。

「先ず、お母さんが迎えにくる出入口まで行こうか！」

女の子は何か返事をしたが、全く聞き取れない。トコトコ出入口に向かつた。なかなか出入口まで距離があつた。途中、女の子が、ここでどこ？としきりに気にするが無視。

「迷子になっちゃった！」

「大丈夫、俺わかってるから。」

「今、どこー？」

地図を広げ、現在地を指差してあげる。

「東ゲート行かない？」

東ゲートに向かつてゐるのに…

「今、向かつてるよ。」

「どうしょー今どこ？」

どうしようつて説明したじやん…人の話を全く聞いてないね君は…そんな女の子は無視して東ゲートまで歩く。

「ねえお父さんは、どこにいるの？」

ふと気になり聞いてみた。

「南ゲート。」

南ゲート…東ゲートからかなり離れてるぞ…しかも、お父さんはそんな所で何をしているのか…？家族揃つて理解できん…

「ねえーー人も帰るの？」

君の為に一緒に出入口に向かつてゐるのだよ…お分かりかな？

「まだ帰らないよ。」

出入口まで来ると女の子は、もう一人でいける…と言つて走つて帰

つて行つた。

俺の親切は女の子には少しも伝わっていないだろ？…
というか、娘を一人ほつたらかしにしていた親の顔を見てみたいも
んだ！

多分、女の子に似て眉毛が繋がり気味なんだろう。

後から聞いたら女の子と楽しそう？に遊ぶ俺に怒つていたらしい。
遊園地は、一人で楽しむのが最も良さそうだ。嘘だ。

こんばんスピバーン。

最近、秋らしく肌寒くなつてきましたねー。そろそろ、夜のコンビニの前にはスウェットを着た若者がたむろし始めるんでしょう。風流ですねーーー！

ええ、今夜から始まりました!!

逆行は当然ながら利ふのみでござりぬ

パラツパー

「私も昔は若かつた！！」

のパートナーはリスナーの趣向から送られてきた、普してしまつた恥ずかしい話、面白い話を読んだことこのつとおもわひばなコーナーです!!

えーでは、最初のお葉書。

ラジオネーム、スカルさん

“中学の頃、勝負に負けた俺は薬局の前にある「ソニカ」の販賣機を両手で揺すりながら「コンドームが出てこないよ！－！」と叫びました！当然、歩行者には変な目で見られました！－！”

中学生ってのは性に一番興味がある年なんですかねー。罰ゲームは毎回こんな感じでしたよね？違う？

次のお葉書は、またスカルさんですね！わざとです！

”中学の頃、勝負に負けた俺は給食に使う配膳台の上でフリッジしながら二人エッ〇チを読まされました！クラスのみんなには変な目で見られました！あそこが反応したかは秘密です“

の頃、初めて兄貴の工口本を読んでオシッコをチビりました。余談でした…

次は…ラジオネーム、剛腕さん！

”高校の時の話、コンドームつて空気入れるとかなり、膨らみますよね！それをたくさん作って、友達のスカルとふ○みで夜中、民家に投げ入れてました！“

えつーと、すいませんでした…！若気の至りとしか言えません…！反省します！時効とゆうことで勘弁してください…

以上、今回は二通読ませて頂きました…！スカルさんと剛腕さんにペナント送ります！

次の「一ナ…！」

ぴっぴつらぴーぴーー！イヒー！

「私が見つけた面白い人…！」

えつと題名通りで「さあーやすーでは、最初のお葉書はジユノンボーアさんの投稿です。

“地元では有名の、おはよつじぞいます！おじさん。いつも自転車に乗つていて大声で、おはよつじぞいます！つてすれ違う人みんなに言つてます！怪奇です。”

ふあみも見たことがあります！夕方なのに、おはよつじぞいます！でした。挨拶し返したのに見向きもせずにちやつたよ…！彼は自口満足で挨拶してるんだよ…！きつと…！

次のお葉書！チビルさん！

”昔、住んでた借家のお隣さん。いつもパンツ一丁、カーテンがないから室内丸見え！室内には家具らしきものがない…しかも、家あるのに車ん中で寝てることがよくあります…！”

あの人は、仕事してんのかなあ…？最近、見てないから生きてるかも

分かんないね…だんだん肌寒くなつたし乾布摩擦してるだろつねえ
！」

以上、二通のお葉書読ませて頂きました。お一人には、熊の置物を
送つときます！！

次のコーナー！！

タタンターン！！

「恋の伝導師ふあみに聞く！！」

はーい！恋の伝導師」と、ふあみが恋の悩みに答えていきます！
お葉書を一通！ラジオネーム、恋するウサギちゃん！
“何故、人を好きなるとこんなにも苦しいのでしょうか？”
そんな、あなたはミュージックアワーを聞くしかありません！！

次！繋がり眉毛さん！

”ぶえーつ！じじじ？今、何時？”

ぶえーつ！…じゃねえ！

そんな、あなたにもミュージックアワー！！

お一人には、白い恋人を送つときます！ちゃんと食べれるから大丈
夫だからね！！

えつーと今日は、選挙速報の関係で、ここまでです！！
これからも、どしどしあ便り送つて下さいねえー！！

では、ふあみがお送りしました！また、来週ー！！

GOOD NIGHT

FM・ふあみ2（龍書き）

下ネタが含まれております。

「んばんは。ふあみで『ぞい』ます。秋の夜長どりお過しですか？僕は、片手でブラジャーのホックを外す練習しています。マドモワゼル。

お暇な方は、僕と同じくブラジャーの外す練習か…

【ファミマ】にお付き合ごと下さい…

最近ねえー携帯灰皿で『ティライト』します！－余談です。今日は、後ほどビックなゲスト呼んでますから期待して下さいねー！

では、最初のコーナー！－

チャラン ラン

「私が見つけた面白い人！－」

最初のお葉書は、ラジオネームふあみ大好きさん！

“私、コンビニでバイトしてて高校生くらいの制服姿の子が、見本として置いてある、おでんを新しい容器に入れ始めました。面白くなりそうなので黙つて見てました。見本のおでんは本物ですが何時間も経つてるのでカピカピに乾燥してて冷え切つてます…男の子は、おつゆ貰つていいですか？と聞いてきたので、いいですよ。と返しました。男の子は、おでんの什器から温かいつゆを入れて、それを持つて店をでていきました！私は、ほつときました！見本だから要らないしね！”

それは衝撃？笑劇？的な出来事だね。でも、僕の推理から言つと高校生くん的には…

なんとか気違ひと思われたらし…止められなくてよかつた…家に

帰れば弟達が腹減らして待つてる！ただいまー！「おにいちゃん
今日は、おでんだぞ！「おにいちゃんは食べないの？」俺は、いい
よー食べなーはーつ…かあちゃん何してんだよ。早く帰つて来て
くれよ…

せつないよね。まあ妄想は膨らむけど男の子のやつたことは犯罪だ
からね！…真似すんなよ…！
まあ真似できないけどね…！

つぎー。グラッセさんからのお便り…！

”面白いのは俺自信だよ。自動車免許のために会社辞めた俺！そし
て、親に家追い出され私物捨てられ、買つたばかりの車も取り上げ
られ、公園にあるトンネルに住んでました！“

俺もグラッセの自宅（公園）には、顔出したけど酷いね…ホームレ
スの皆さんのがんが分かるね…

グラッセはお笑いコンビ麒麟の田村みたいな生活した訳だけど、少
しは家族、お金の有り難み分かったのかな？分かってないだろうな
あ…

以上、二通読みました！お一人には、熱々のおでん送っちゃいます
！芸人みたいに投げ付け合つなよ…！

まだゲストの方が、来ない様ですねえ…話は変わりますが、ふあ
が小学生低学年の頃かな？友達のあつくんって子の家行きました。
あつくんは、俺をお姉さんの部屋に導きました。何すんのかなあ？
なんて思つてたら、あつくんは箪笥の前にしゃがみました。そして、
何故かパンティを取り出し、頭に被りました。姉ちゃんのパンティ
を被る友達…今でも理解できません。あつくんのお姉さんは可愛く
ありません。余談でした。

「ちいーす…！」

おつ…皆さん、お待たせ致しました！今日のゲスト…スカルさんです！

「「んばんわ！スカルすっ！」

「無沙汰します！今日はですね、スカルさんの貴重なお話を少しでも沢山リスナーの方々に聞いて頂こうと思いまーす！リスナーの方々には事前にスカルさんへの質問をお預かりしております！

「有り難いです。どんどん聞いて下さい！」

では、一枚目。スカル大好きっ子さんから。僕は、生まれてから一度も彼女がいません…どうしたら、スカルさんの様に魅力的になれますか？って言う質問ですがー。

「僕の魅力ってのはね、ただひとつですよ。その魅力がブラウン管を通してでも皆さんに伝わるのんだらうねえー」

で、その魅力とは？

「あそこがテカイってことだね」

…まあ一応、詳しく聞きましょ。

「僕の男臭さ、まあ獸な感じは、あそこからでるオーラが凄いからだよ！皆さんには、画面を通してでもギンギンに伝わってると思うよ、ギンギンにさ」

はい。ありがとうございました。次のお葉書…は…ないみたいですが…では、最後にスカルさん！新曲の紹介を！

「今回の曲は、世の中に蔓延する」「飯離れを危惧した曲になつていまして…決してパンを全否定する内容の曲ではないですよー！アハハつ。」

で、曲名は？

「艶姿コスタリカ2007！」

「ゴウヒロミ」が歌つた方が、さまになりそりですよね…で他には、何があります？

「あと、舞台がやりますー！全国各地で行います。」

「時津風は千の風になつて」

で？

「まあ、飛んだりしますよ、僕が。あとマイクパフォーマンスとか、なんだかんだしますよ。」

はい！ ありがとうございました！ これからも頑張って下さーい！

スカルさんでした！！ パチパチパチ。

「ありがとうございました！」

早く、掃ける。もう来んなよ！

えー今日は、ここまでです！

余談ですが、声優のやまちゃんと八嶋さん、似てますよね。おしりかじり虫が人気らしいですねー。なんなんでしょうね？ かじる程度なら、許せるけど噛み切るような虫なら怖いですね！ なんか、そら豆みたいな顔が憎たらしいですよね。余談ですよ。

来週は、私の癖！ と、私が知ってる口だけの話！ のコーナーをお送りする予定です！！

では、来週またお会いしましょう！！ MCは、” あなたのお口の恋人 ” ふあみでした！！

GOOD NIGHT

せんやー（前書き）

野蛮な遊び…

せんそー

俺が小学生の頃、戦争、とゆうゲームをした。

グラッセとよく公園に行つては、戦争、をしていた。
まず戦争とは、石を投げ合つ、以上。

今、考えたら危険極まりない遊びだ、遊びなのか？喧嘩だ！いや
殺し合いだ！

ある日、いつもの様にグラッセと公園に行つた。もう当時から外で
遊ぶ子供は、激減していたので公園には誰もいない。

「やることねえなあ…」

やつぱ、ガキでも田的なしじや公園に来てもハイになれない。

「せんそーするか？」

「おう！」

まあ一応、目的は決定。

公園は50㍍ペールぐらいの広さ。南側は、丘になつていて、戦い
を有利に進めるには、南側に陣をとるのが上策だ。

「おし！ジャンケンで場所決めしょー！」

このジャンケンで全て決まる！

「じゃんけーん、ポン！」

負けた。

俺は北側となつた。

軍備補強タイム！

石を集めると、石が少ない上に小石……これじゃあグラッセを壊
すことが、できない！

辺りを見回すと、ペットボトルを発見！砂場の砂を詰めて爆弾の完
成。ぐへへつ。ってな感じで小学校指定の安全ヘルメを装着し、準

備完了！

「グラッセ～！準備いい？」

「おつけえー。」

開！戦！

グラッセは、木の陰に身を潜めていやがる。

俺は牽制の砲撃を放つた。ヒュン！！

弾は、大きく逸れた。俺はコントロールが昔から悪い。牽制にも、ナリヤしねえ！！

グラッセも、砲撃を開始。グラッセの弾は俺の1m横で着地。なかなかの精度だ。俺は身を隠す物がない：闘いが長引けば、いつか片目を失うやもしれん！！

俺は、収集した武器をポケットにいれ、敵陣地への突入の期を待つた。

グラッセの砲撃の終わりを突く！

……今だ！

俺は、駆け出した。

「I am スバルター！！」

つて言つてはないだろうが、そんな勢いで。

俺はポケットから弾を右手に装填！ラピッドファイアの如く連射しグラッセの攻撃の手を緩ませる！しかし、流石は”中部の人参スナイパー”隙を見て、攻撃している。グラッセの弾が、ヘルメに当たり、ガン！と揺れ動く。こりややべえ！ヘッドガードイアンの装甲がもたねえ……

あれを使うしかねえなあ：俺はペットボトつじやねえ：爆弾のピンを抜きグラッセの頭上に放り投げた。グラッセに降り注ぐ、細かい毒粒子。グラッセは、突然の特殊攻撃で完全に混乱している。毒粒子は、目と口に入った様で慌てふためいている。

今が好機と、俺は木の陰に滑り込んだ。グラッセは、押されていると感じたのか、奥に逃げていった。

荒い呼吸を整え、周りに落ちている弾薬を拾つ。

ふと正午を知らせる鐘がなつた。

昼飯時だ、決めに行くか！俺は丘の中腹まで走り叫んだ。

「グラッセでてこい！」

「ん？あまりに戦争に熱中していて気付かなかつた…」

女の子3人が俺の前方10m前に居た。そこに、グラッセがニヤニヤしながら現れ女の子達の横についた。

グラッセの考えは、すぐ理解できた。一般人が、横にいたら流れ弾が命中してしまうかもしれない！俺は不用意に攻撃できない…グラッセは女の子達が、この場を離れない様に女の子達に話しかけている…ニヤニヤしながら…

何か話し終えると、グラッセは俺に攻撃してきた！

俺は咄嗟に身を翻したつもりだったが、腕に見事命中。

「ホントにやつた！危ないよ！」

「いたそーやめなよ！」

女の子達は口々に喰いている。グラッセに、そんなことを言つても無断だ。あいつの目は人を殺したことのある目をしている…

「だからー」いうゆうゲームなの！」

グラッセは弁明しがてら、見せしめの様に弾丸を俺に放つた。イテーッ…このままじゃ、成す術なくヤラれてしまう。ここは、一般人を排除するとしよう。

「3人とも危ないから離れな！」
…何故かスルー。

グラッセの猛攻は、緩まず俺の身体から赤い鮮血をほとばしる。女の子達は、表情を変えていった。彼女達は狂気に魅了されていた。彼女達は、一般人なんかではない！敵だ！排除するべき存在！俺は

弾丸を右手に装填。

放つた。

俺の放つた弾丸は、ぐんぐんグラッセに迫る。射ぬけ！我が分身よ！人参に風穴あけてやれ。

見事、女の子に命中…

やつべー…俺は走つて女の子に近付いた。

「ごめん！大丈夫？」

女の子は、腕を押さえ下を向いている。泣かした？泣かしたのか？

俺は恐かつた…学校にバレて先生に怒られるのが…

「お前、関係ない子に当てたらあかんやろー」

「最悪…！」

うるせえな！俺が一番焦つとるんじゃー…女の子の顔を覗き込む…泣いてない！…ホツと胸を撫で下ろす。

女の子は、おもむろにしゃがみ込んだ。立ち上がった女の子の手には…石が握られている…！

「痛かつたんだから！」

決めゼリフと共に石を投げる女の子。

グフッ！

そして、他の女の子達も感化されたのか、死ね！最悪…と言ひながら俺に石を投げ付けた…

グラッセもニタツーと笑いながら俺に石を投げ付ける。

3対1…俺は、公園を逃げ回つた…最終的には、

「お前ら死ね！」

と吐き捨てて自転車放置で走つて家に帰つた…

そんな小学生時代。もう、あれから十数年になるが…最近、あの野

蛮な遊び、

“戦争”

がどうしてしたくなる。

どうですか？そこの貴方！一緒に興じましょ！

ボク…ト…

センソ…

シリ…

せんそー（後書き）

貴方を狙っていますよ……ほら、グラッセが後ろに！――

ちょいとクリスマスなんか語つたりね（前書き）

『Happy X-mas!』

ちょいとクリスマスなんか語つたりね

『クリスマス・イヴ
『クリスマス』

現在、2007年12月5日…

ご近所さんの家は、まばゆいイルミネーションをもつ飾っている。カツブルは、クリスマスの計画を立て、相手の喜ぶ顔を思い浮かべプレゼントを選ぶ。テレビからはクリスマスの話題が飛び交い、雑誌を見ればクリスマスのとつておきイルミネーションスポット特集。

ああーなんたることか！

僕は悲しいよ！そして、おぞましいよ！

俺は最近、彼女とお別れをしたのだよ。約束してたのだよ、聖夜も前夜も一緒に過ごすと…！

ああー神よ、2日間だけでいい！俺を貴方の隣に置させてくれ…！

毎年、クリスマスに彼女がいない奴らが集まり鍋をする。酒を酌み交わし、友情を確かめ合う…だが何故だろう？虚しくなるのは…

俺は『寂しい奴らのクリスマス・パーティー』の参加は一回だけだ、近々一回目を華々しく飾るが…

まあね、捨てる神あらば拾う神ありってね。分かるよね？

我らが神、山下達朗様だね…！

あんなルックスで愛を語るとは、さすがだ…！山下様なら我らの気持ち分かって下さる。

『きつと君はこない。

一人きりのクリスマスイヴ。』

戻らない人を待つほど寂しさがつのるもんはないよね、山下？

『まだ消え残る、君への思い。忘れらそうもない。』クリスマスとかやられちゃー忘れられるもんも忘れらんないよね、達朗？

ほんとに今月辺りは辛いよ…年越しとか初詣とか微妙にイベント盛り沢山だよ…

なんとね、私の元カノはイヴが誕生日なんだよ！笑うしかないね！

アハハ…アハ…ハハ…はつ…

でもさあ、別にクリスマスに彼女が居なかつたり、仕事だつたり、予備校だつたりしても別に悲しくなくね？ぶっちゃけ？

…つて心にもないこと言つてもダメだよ。君の背中から、深い深い哀愁が漂つてんだから…

まあ、クソッタレ聖夜もビチクソ前夜も家で過ごすのが正解なのさー！街角とか駅前とか行つたら、おてて繫いだポカポカうんこちゃん達にクソ吹つ掛けられて胸がズキズキしちゃうからね。

まあ、これだけ言つといて何だけど俺はクリスマス大好き。あの街が活気づいて、雰囲気がほわつーと暖かい感じとかね。ホントは山下よりマライア・キャリーの方が好きなんだよね。でも大好きな人が傍にいればもつと素晴らしいのに。もちろん、女サンタのコスプレでね！

とにかく…

僕なりの楽しみ方でクリスマスといわは、楽しく過ごしたいと思います。

次回は『ふみのすんばらしいクリスマスの過ごし方』です！
じへい期待！！

ちょいとクリスマスなんか語つたりね（後書き）

ファッキン くじります

いやー皆さんお疲れ様です、ふあみです。

2007年の輝かしいクリスマスはどうでした? カップルで過ごしたなんて言わないですよね?

海外では家族と過ごすのが一般的らしいですよ。

正直、今となつては僕自身クリスマスどうはどうでもいいんですよ。でもね、やっぱりカップルなんかを見かけちゃうと腹立つ言い訳なんですよ。だからね、反抗、反発の精神が湧くんですよ。言わばアンチテーゼですよ。

クリスマスへのアンチテーゼ!

結局、男だけの鍋パーティー（慰め合い）なくなつたんですね…主催者のスカルの御祖父様が亡くなられましてね。鍋どころじやないですよね。暇を持て余す結果になりまして、当初に私個人で計画していたことを実行しようと思つたわけです。

で！ その計画とは…サンタクロースのコスプレをしてカップルが集まるイルミネーションスポットに行つたり、普通にコンビニ行つて立ち読みしたり、公園のベンチでしみじみホットコーヒーでも飲むとか、生産性全くなしの自己満足な計画を立てたわけです。

早速コスプレ買いに行きました！ 予算は一万円以内、まあ確実に足りる金額持つて意気揚々に出掛けましたよ！ チヤリでね。

はあー到着、なんか肌寒い夜にチヤリで凍えながら、一万近く出費して俺は何がしたいんだ？などの思いを無理矢理に払拭して店内へ。コスプレコーナーに小走りで向かう。なんと、コスプレコーナーにカップルが…！ 本当に世の中って皮肉だなあ…と内心思いながら力

ツプル観察。

「ねえーこのメイド可愛くない？」

「俺は、こっちの方が好きだな！」

「ナースもあるよお

語尾にハートが付きそうな感じ。

「あーー有りかも」

下心まるわかりの発言だな！

「もう決めていいよ

また語尾ハート口調。

「ええーじゃあコレ！…」彼が指差したのは…スケバンのコスプレ

！衝撃！てか大穴だろ！予測不能！まさにダークホース！

「えーー…………いいよつ

つて、まさかの焦らし！そして、承諾！…クリスマスにスケバンの格好してアレするんですか…！

有り得ない…いやあー有り得るぞ！絶妙ではないかい！スケバンのクリスマス、いつもお堅いスケバンも聖夜だけは乙女になつて…萌えーーーいや、萌えはしないわ。その後も俺にお構いなしに、きやぴきやぴ話すカツプル…

いやー右の拳に力が入りますなあ。怒りを感じていた俺だが同時に怒り以上に羨ましさが胸に込み上げた。

おつと、忘れちゃいけない！なぜかいつも妄想に無駄な時間を使つてしまつ！サンタのコスコス…あつた！あつた！お値段は七千コスコス、まあ妥当だ。手に取り形状、生地を入念にチェック。俺のイメージしていたサンタと比べる。

10分後、店を出た。手ぶらで。ビーしても気に入らなかつた…！つて言うよりも…

いつたい俺はどうしちまつたんだ！こんなのは自暴自棄じゃないか！俺は確實に『クリスマス』カツプル『俺』つて現実から逃げてる

だけじゃん！！

俺は肩をがっくり落とし寒空の中家路を急いだ。

まあ結局、前夜も聖夜もバイトでした。バイト先の若い女の子は当然の如くシフトに入つてないわけで禿げたオッサン、今まで一度も恋愛してなさそうな店長どこ一緒に、せつせとバイトに励んでおりました。バイト終了後はふらつとパチンコ屋により、閉店間際なのに三千円注ぎ込み家に帰りました。

家に帰ると俺の分のケーキが置いてあり一人無心で食べましたよ。

テレビ見てもしかたねえーや、どうせクリスマス特番だろ？なんて思い寝よつとした矢先、着信。

見知らぬ番号から電話…

それは、26日まであと15分前の出来事でございました

つづく…

誰だよ…俺は寝るんだよ。

今まさに、この聖夜に一人で寝るんだよ！「タツで！…着信はしつこく鳴り続いている。そんな急用なのか？渋々通話ボタンを押した。

「もしもーし、誰？」

「声でわかるだろ？」

「なんか、めんどー！」

「で誰？」

「ヒントだすわ」

「いや、いらん。誰だ」

「つまんねえなあ、スカルだよ。ケータイ変えたから電話した「そうゆうのメールで済ませばいいからね、スカルちゃん」「いいやん、せっかくのクリスマスだよ。」

クリスマスだから電話なのか…意味分からぬ。

「うーん、そうなの。俺よく分からぬ。」

「あと10分くらいでクリスマス終わるね。ふあみ何してた？」

「ツンドラについてネットで調べるのに時間費やした一日だったよ。」

「へえー、ツンドラねえ。その単語聞くの中学の地理以来だよ。お疲れ。」

信じたの？なんか俺のボケが…

「スカルはどーなの？」

「俺は彼女と過ごしたよ、今は一人だけね

なんだ？嫌がらせか？発する言葉がない。

「ごめん、なんか自慢みたくなっちゃったよーははっ」

完全に見下されちゃったよ。

「でさー何なのよ。残り少ない聖夜を俺とお喋りして締め括るつも

りなの？あと5分もしないうちに宴は終わるわけよ！俺的にはね、一人でしんみりと心静かに過ごすつもりだったわけよ。なぜ邪魔するの？なぜ立ちはだかるの？なぜなの？スカルちゃん！

「一気に喋るなよ。この通話…この繋がり…なんか違う。この一人で共有している時間は俺が金で買つてるわけだから立場わきまえて話してほしいな」

「結局、通話料は俺が払つてるのだから俺に喋らせろ！ってことね」「まあそだよ、簡単に言えば…とにかくふあみと話す気分だつたつてことよ。そんだけ」

「ふーん、でも特に話すことないよ。眠たいし」

「バイト疲れは極限に達していた。正直、早く寝たい気持ちで一杯だ。「あと数分でクリスマス終わるねえー。じゃあ俺からふあみにクリスマースプレゼント！」

「ありがとう、友よ。だが期待はしてねえよ」

「いやーふあみには興味あることだと思いまますよー」「なぬー！？スカルのこの感じ！なにかある…

ざわ…ざわ…ざわ…

ある漫画をパクつているわけじゃありませんよ。ざわ…

「ふあみの最近別れた…あれ？名前なんだっけ。とにかく、ふあみの元カノを駅前で見たよ！」

「かはつ…胸が苦しくなる話題だぜ！ぐ、くわ、詳しく言えよ

「男の子と歩いてたよ、おでて繋いでな！」

プレゼントちゃうやん…

「マジかいなあ。だつて別れてそんなに経つてないよ？」「

「いや、俺に聞くなよ」

「まあね、まあね…別れたわけだしね…そんなん関係ないわけですよ僕ちゃんには！でさーその男の子は、どんな奴だったわけ！？」

「気になつちやう感じですかー？」

「モノマネとか挟まなくていいからね」

「モノマネとかそんな立派なもんじゃないって！」

「あのね、そう言つことじやないから。でどうなのよ?」

「聞きたい?と焦らすスカル様。

「聞きたい!と聞くのもべふあみ。それは服装?面構え?内面?と問うスカル様。

「じゃあ全て、としもべふあみ。

「全てねえー、脳内整理するから待つてー!とスカル様。

「スカル君さーーいい加減にしてよーそんなに忍耐強い男じやないのよ!僕は」

「うん、なんか俺も引っ張るの面倒臭くなつてきたよ。じゃあ一言で彼を言い表すよ。」

「おう!いいぞ!心の準備は出来ているー!」

「…オタク

「え?」

「なんか無理して俺はオタクちゃうナビ別にそういうの嫌いじゃないよみたいな感じのTHEオタク」

「そう来たかーー!俺の後釜は電車かーー!」

「顔はふつーに冴えない顔してるよ。どっちかと言つとかつこよくな

ないね。訂正!どっちかと…とか無しにかつこよくな

「IちゃんはB専だから本領發揮つて感じかなあ。うーん、かなしいねえ、色んな意味で。

「以上で俺のプレゼントは終わりですー!あ、いつの間にかクリスマス終わってる」

「すじく豪華なプレゼントありがとうね、僕は疲れた。寝るよ」

「そうか…寝ちゃつか。名残惜しいなあ…」

「もういいだろ?寝かしてくれ、否、そつとしといておくれ

「しようがない、ではおやすみ…」

「おやすみ」

携帯電話を閉じると俺は無我、明鏡止水の心で眠りについた。

数日後に聞いた話だが、スカルはクリスマス前に彼女と別れていたらしい。それでもスカルの要望でクリスマスは一人で過ごしたのだと聞かされた。スカルの電話を切るあたりの暗い落ち込んだ感じは、そのせいだったのだろう。

スカルよ…

君も寂しかったのか…

気付いてやれなくてごめん…

この失恋の寂しさを俺と分かち合いたかつたんだな…

でもよお、あのエちゃんの話聞いたら俺もつと落ちちゃつただろーが！やっぱスカルは侮れん…

終

ぱられるつ！

今日は“ぱられるつ！”（以後パラレル）と言つたことに關してお話し致します。

まず始めに“パラレル”とはなんぞや？といつことを説明致します。簡単に言つてしまえば、ラブコメディ的要素を含んだ状態のことです。“萌え”に似ている感じですが全く違います。

上記のようなことを何故に“パラレル”と言つか説明すると、ラブコメ漫画の名前から引用したモノだからです。“パラレル”を語るならパラレルを見ろ！とは有名な言葉ですよね。

基本的な“パラレル”について理解したところでパラレル用語を軽く説明します。

パラリスト…パラレルに熱い願望を持ちパラレル的妄想に長けた者。スカル氏はかなりのパラリストです。グラッセも隠れパラリストです。

パラつてる…動詞。パラレル的なドキッとなる瞬間、場面を指す。またパラレル的妄想を繰り広げている時。

“パラレル”についての細かな解説をしていきましょう。

ラブコメには必要不可欠な主人公。基本は学生です、パラレルでは学生まででしょう。見た目は中の上は必要でしょう。超鈍感でボケよりツツコミ系な人物が適当ですね。

次はヒロイン。これは好みによって、一人か複数か別れるでしょう。複数なら、元気な幼なじみ・おつとりとした眼鏡の子・積極的な年下少女・S要素を含むセクシーな先輩か先生など…自身のパラリスト度によって妄想は無限に広がります。でも注意して頂きたいのは、あくまでもヒロインが宇宙人、架空の生物などは厳禁です。あと、

年齢差あまりない方がパラレルらしいでしょう。一重人格など特殊な人物もよろしくないでしょう。パラレルは現実的に有り得るところが目標なのです。ふみ的には姐御肌のボーカルシユな女の子がいいですねー…ぐふふつ

ここまで、きたら後は絡みであります。基本はドロドロとした愛憎劇はなしです、主人公やヒロインの死、病、中絶、出産、下ネタ的要素…そんなものはパラレルに必要あるません。大人びた感じもやりません。初恋のドキドキのような清々しさ…どうしようもない歯がゆさ！それが“ぱられるつ！”なのです。まさに“ぱられるつ！”なんです！2回言わせて頂きました。

皆さんに注意して頂きたいのは、パラリスト＝ラブコメ漫画が好きな奴、という誤解はしてほしくありません。パラリストとは、パラレル的な恋愛を望む者や、そういう妄想をしてしまう者を指すのです。だから、私的には全国の大半はパラリストであります。パラつてる訳です。なのでラブコメ漫画はパラリスト達の妄想の結晶…血と汗なのです。平たく言えば参考書です！

あなたが新しい環境（まあ進学、少し苦しいが就職も含む）に新しい出会いを望む場合に、その出会いはパラつてませんか？確実に運命的な出会い、そして清々しいお付き合いではありませんか？

そう、あなたもパラリストなのです……。

「で何？」「これコメディー？」「なんか生理的に…」って思った貴方…！

もう一度、冒頭から読み直す必要がありますね。

例外的に愛憎劇好き、チャリンコで2ケツ！よりもスポーツカーでドライブ！つてな大人の方は…残念ですが、ここまで読んだのはただの徒労ですう。

「俺つて…もつ、もしかしてパラリストオーーー？」って思った貴方！
開眼おめでとうござります。パチパチ…
早速、ラブコメ漫画でも読んで己を磨き立派なパラリストになって
下さい。

長い間、お付き合い頂きありがとうございました。
では、このあたりで失礼します。

『著者』

NPO法人ばられるつー会長

ふあみ

『協賛』

WPAおませなお年頃級世界王者

スカル

僕の世界は八畳（前書き）

氣色悪い話が一話続きます。

二ートになつて数ヶ月。親のすね、ゆっくり食い込む俺のトウース。ほぼ一日、八畳部屋で過ごす。そのお供は二ンテンドー64。劇的な勢いで伸びるスマッシュ・シューブラザーズスキル。だが、俺のスクリ披露するブラザー居す。

金ない、彼女いない、学歴ない、もちろん特技・趣味ない。ナインなハート、トウナイトも果てしない脱力感にハートブレイク。

ラップ調にしてみたつもり。

もはや小説でない有様ですが、こんな感じで更新していきますよ。最近、チビルと言つ友人と話していましたが人それぞれにフェチつてありますよね。

「なんだよー糞二ート野郎のフェチ話かよ！」
なんて思わず聞いて下さいよ、そこのお兄さんもお姉さんも。ちなみに僕は膝の裏の…名称は知りませんが、触るとくすぐつたい所です。もちろん女性のです。

特に、膝裏（命名）のH型のシワ？スジ？あれが大好きな訳です。
「テラキモスWW日本語でOK？」

なんて言つてるネット界の名譽会員の皆さんも、鏡で貴方のきつたない膝裏を見て下さい。

そうです、そこが僕が愛してやまない、触れざることが許されない、心を搔き乱す、ひと夏のアバンチュール。

「なんて言つんですか…緊張感？」 D〇 PUMPより引用。

人体の神秘Hです。なんか、卑猥ですが…

「僕はHが好きだー！大好きだー！」

つて事なんです。ここから以下は、少しマニア過ぎる話になるので
苦手な方、ニート恋愛対象外の方、休日は一先ずカフェ！な方はお
やめ下され。

膝裏改めHを語り疲れたので、続きは次の回に…

おまけラップ

セーイ！…ジャガでるかヘビがでるか！？
ジャガー横田問うリスペクトウ。
オヤジ！ジャー！よそう！飯！
貴方トツティー出雲崎！悲しみのジャパニアーメーション！？
遙か彼方、貴方叶つた？語つた日々遠くー。聞こえてるY.O！悲し
げえな甘酸っぱあなスウィートレイン…

イエーヤア！…センキュー。

僕の世界は八畳（後書き）

ふあみのリリックが良かった人、拍手！！

八畳からの離脱。彼方、桃源郷へ。（前書き）

タタタタ大好き抱きしめたい

八畳からの離脱。彼方、桃源郷へ。

前回のあらすじ。

おばあちゃんのヴィトンもどきバッグから押借した一握りの黒飴を持ち、市内に乗り込んだ俺。駅前でポケットテッシュの配布を巧みにかわし、帰宅ラッシュの人々を搔き分けたそこには…

なにこれ！？ぐだらねー

本題！『ああー無情フェチズム～貴方のフェチこつそり教えて下さいませんか？～』

フェチって言つたら脚は外せないって方は多いですよね。
脚の太さ、色、肌質、まあ基準は人それぞれですよ。

しかしね、僕がスポットを当てたいのは…脚の毛です。

「そうきたかあ！！」

と言つた貴方。僕に一本取られました。存分に悔しがつて下さい。
すね毛、腿の毛、基本は全剃り。そこは僕も賛成です。しかし、僕の場合は桃毛（命名）を剃つてから日が経ち、毛先が少し見え始めた、青ヒゲ状態が…

「すつきつだー！オモニー！」

キモいですが僕？ねえ？キモい？

説明は出来ないんですが、同じ人間なんだな、みたいなことですよ。

2ちゃんねらーは、そんなの見た…

「毛えーーーこれだから3次元は…やっぱ俺の彼女は○○タンしかいねえよハアハア」

つてな、もんでしょう。早く現実を見てほしいですね…糞もすれば屁もするし、よく見たらヒゲ生えてるのが人間美つてモンでしょうが。

でも、2ちゃん文化で僕が多いに賛同するのは『絶対領域』。もは

や、全国区のフェチスポットです。僕のフェチズムから言えば、ニーソックスが腿に食い込んでいるのがベストな訳で…

なんか自分が気持ち悪い上に、可哀相でならないので、もうやめときましょう。フェチ話は仲間内でする程度がいいようです。

ホント言うと胸が一番好きです。でもゾーサンの方が略以上、おっぱい星人ふあみでした！！

オマケ

彼を見つけると黒飴を握り締めた拳を突き付けた。俺は、ゆっくり手を開いた。彼は黒飴に視線を落とし、素早く俺の顔に視線を戻した。

「俺は、ハチミツきんかんのど飴しか食わねえーんだよーーー！」

彼は俺をヘッドロックし黒飴を俺の口に突っ込んだ。薄れゆく意識の中、聞き覚えある歌が…

「毎日面白いイエイ…毎日…おも…イエ…イエ…」

あの声、君だつたんだ…

「フルート、フルート…」

と呟きながら俺は事切れたのだった。

END

想像して下さい。2

人の熱氣でむせ返るフロア。薄暗いフロアを縦横無尽に跳ね回る七色の光、人、メロディ。カクテルなんか飲んで不慣れな空間に少しずつ溶け出す。思つままに踊り、叫ぶ。煙草の煙りの向こうからギラギラした視線を感じ、導かれる。一生でこれつきりの出会い。その場限りの共有。二人で。まさにアバンチュール…なんて想像しながら蝉を追いかけた小学生時代。

実は、川から流れてきたので両親が仕方なく育てた俺。

みかんだと思つたらゆず。

金ないなあ…と思つたら財布の端に挟まつてた百円の有り難み。

通りすがり、ヒラリと舞い落ちるハンカチーフ。

「あつ！ハンカチ落としましたよ」

サラサラとした髪がなびく、甘い香りを纏う彼女はゆっくり振り返つた。

「ありがとうござります！」

「…」

いつものように、うなだれながら仕事に行く。職場で、あれ? 今日、仕事休みじゃん! って気付いた時の得した感。

応募してた懸賞が当たつていて、忘れたころに景品が送られて来た時の、過去の自分への称賛。

元彼とよく待ち合わせした場所に、何気なく行つた。忘れたはずの思い。でも、ふと思い出す彼。忘れぬ想い。かけがえない過去を振り返り、明日を思う日々。現実では進むことしか許されない。ため息を吐き、その場を離れる。

「〇〇! ...」

過去を飛び越え現在に。変わらぬ彼に安堵し涙が零れる。彼は微笑みながら泣いている。彼の答えはうれしいことに私と一緒にらしい。言葉なんていらない。彼の胸に飛び込む。熊出没注意のプリントTシャツに。とにかく汗臭い。酸っぱい抱擁。

初めて食べた時のチョコミントアイスの衝撃。俺だけか?

海老ちゃんヒマック行ってエビフライオをアーンつてやつてもらい、海老ちゃんCM出演の日焼け止めを塗つてあげたのちに一人でモデル歩き。

「マジかよ?」って言った後の、マジだつて…と言つ友人のビザ顔。

漏れる…つ〇〇漏れちゃう…トイレー…早く…ふう…間に合つた…
ひつ!便座!冷てつ…!

控えめな彼女の精一杯の…

「手つなご?」

(これは私的にはキュン死確実)

「ここまで、これを読んだ時間の有効性。一回もクスリともしてないのに、ここまで読んでしまった絶望感。

ああー腹減った。生ゴミでも食つか!程よく発酵した魚の内臓うめ
えー。…オエツ

「ゴキブリを鼻の頭に乗せ、愛でる。(失神だな)

はい。おしまい。

ゴキブリの回

なんかブログチックになつてきますが…
俺の体験した悶絶必至のゴキブリ話いたします。

その一

家族団欒で夕食中、視界のふちに黒い塊が浮遊していた。俺は視線を黒に移した。「ゴキだ。俺は叫んだ。『ゴキブリー！震える指で奴を指差し椅子から爆ぜるように立ち上がつた。しかし時すでに遅し、ブリはお婆さんの紫メッシュのクルふわヘアーの上に降り立つた。まさに降臨と言つた出で立ちだつた。

その二

夏の蒸し暑い日、俺はテレビに夢中だつた。ん?なんか腕くすぐつた!…………ゴキブリ!…デカイ!触角!エナメルブラック!

その三

喫茶店でコーラを飲んでいた。

半分くらい飲んで気付いた。ゴキブリの子がコーラにプカプカ浮いていた。

その四

養鶏場の餌を保管する部屋。

壁一面に黒豆が無数にくつついていた。潰したら、カマキリの卵みたいにチブリがひょつこりひょうたん島。

その五
もう一人のお婆さんの家。夜ふと起きるとゴキブリ2匹くらいが飛び回つてた。

続・その五

夜、お婆さんは顔に蚊がとまつた感覚がした。自分の頬めがけビンタ。奴を仕留めた手応えがあつたので、そのまま寝た。翌朝、バラバラのゴキブリが枕脇に横たわっていた。

その六

ゴキブリを殺そうとして、何故か竹刀を武器に選び突きを放つた。見事、壁に綺麗な円の穴が開いた。母がゴキブリを殺そうと力んだらフリツときて失神。後ろ向きに倒れストーブに頭を打ち付けた。

最後

実はブリのお腹を撫でてあげると脚をワシャワシャさせて喜ぶ。実は食べるとい、ほろ苦くて白味噌の味がしてイケる……

終わり

プラジヤー登校

昔の話でもしますかね。

中学生の時だ。登校はグラッセと一緒にいた。その日も、朝早くグラッセとの待ち合わせ場所に向かつた。待ち合わせ場所にグラッセは居なかつた。先に行つてしまつたようだ。まあ一応少し待つか…

とその時。俺の足元に何かが、ふわりと着地した。視線を下に移すと…プラジヤーだつた。少しだじろぐ俺。待ち合わせ場所はアパートの前なので、そこから落ちたと予測し振り返つた。だが、無風なのに俺が要る位置まで落ちるのは不可能。ではどうして、ここに下着が…

じつくりとプラジヤーを見る。ピンク、派手過ぎない抑えめなフォルム…「…これは！おかあのだ…！」

何故、よしえちゃん（母）のブラがここに？焦る俺。とにかく足元にブラがあるのは、ばつが悪い。俺は周囲に注意せず学ランの中にブラを突っ込んだ。はつ、目撃されてたらやばいじゃないか！周りをキヨロキヨロしたが、俺の一見下着泥を見た人物はいない様だつた。状況的にはシャツと学ランの間に挟まつたのが、運よく？ここで落ちたと推測するのが正しいだろう。俺はおかんのブラを服に挟んで、のうのうとここにまで来たのか…笑けてくるぜ…。

…ちつ…しまつた…焦り過ぎて隠す場所間違えた…学ランを上から手で押さえない、また落ちてしまう。鞄やポケットに移したいが、リスクがデカすぎる…しょうがない、このままだ。

それより、どうする…このまま学校へ行くか？否…危険だ！見つ

かつたら即アウト！中学生にして下着泥のレッテル！中学生のイジメはエグい…たとえ濡れ衣でも「ブラ！」とか「エロ糞野郎！」はたまた「よしぇー」とか「マザコンー」なんて呼ばれたり…学校はバスだ。

じゃあどうする？…そうだ…登校途中、どこかで捨てれば……そうすれば遅刻しないし、危険分子も排除できる…しかし、ふと母の言葉が頭を過ぎった。

「ブラジャーほしいー」

！…！…そうだ！…よしぇは、下着は高級に限る人だ。俺の胸辺りにあるアレも高級品。故に数も少ない！それを捨てるのは、如何なもんだ！？よしぇが悲しむのは見たくない。

しそうがねえなあ、遅刻覚悟。

いっちょ、家までブラ持つてくか。よしぇ喜ぶかな？右手を胸にあて、俺は力強く走り出した。虚ろな目で…

終わり。

フライジャー登校（後書き）

ちよーーおかあー！ ブラーーー！ 挟まつ…あれ？ おかあ居ねえのかよ…

ふあみ亭ふあみの空手小話

『クラッシャー・ふあみ』でいります。クラッシャーとは空手を習っていた時のおだ名でしてね。

『破壊せし者・賦ア魅』

うむ！カッコイイ。ちなみにミドルネーム？付けられたのは何故か俺だけだった。強いわけじゃないのに。

空手を始めたのは兄貴の空手着が羨ましく、拌借し私服として着ていたほど欲しかった。

欲しい…欲しい…刺繡かつ…いい…かつ…いい…帯なんかいい…リュウ…ケン…リュウ…ケン…

つてなことで空手を始めましてね。ちなみにフルコンタクト空手です。

空手を始めて思つたのは、小学生つえー…！高校生の俺が遊ばれるー…！なんか殴りながら笑つてるー…！ガキつえー…！

しかも、ママさん連中が皆ヤンママつぽこ…！えー…！息子が押され出したら「〇〇！ボディがら空き！イケエエー！効いとんぞ！押し返せエエー…！」そんなことを幼児抱いたママが叫ぶんだから、僕ちゃん絶句ですよ。息子が泣き出したら「泣いてもしょうがねえゾオオ…！手出せ…！テエエエ…！」マジで熱氣がちやう。俺なんかへラへラやつて少しいいのもうつと「もう無理ツス…」なんてやつてるからヤンママ様から見たら、気合に入れろや…！シャバゾウ…！ってなもんでしょう。

だから、俺が通つてた道場の小学生は強かつた！実績も残していたし、大半は俺より帶上。

まさしく、精銳部隊！コマンドー！戦闘集団！殺し屋！ですよ。

んで、のひつからひつ半年？からこやつて辞めました。

過去4戦しましたが全敗でした。

ある大会前に、先生から必殺技を教えて頂いたんです。その技は有名高校空手家の得意技で、門外不出（嘘）なので名前は言えませんが…ヒヨロリンキックといたします。

大会当田。

磨きに磨いたヒヨロリンキック！切れ味抜群！KO必至！感度良好！意気揚々、試合にのぞんだ訳ですよ。まあ結果はお分かりの通り負けましたよ。いいわけをさせてもらつていいですか？僕は極度のあがり症で、脚が上がらなくなるんです…なのでヒヨロック（略）はハイキックなので打てるはずないんですよ。しかも、アドレナリンが…ギンギンに出ちゃうわけです、まるで噴火ですよ。そうすると、相手が見え過ぎたり視界が狭くなり、逆にクラッショをせられるわけでござりますよ。

まあその数ヶ月後にひつそり道場からフードアウトしたんで、ひつじます。

でも結局、最後まで波動拳は出なかつたんだよなあ…

お後が、よろしこよつで…

ふあみ亭ふあみの空手小話（後編）

割つと有名な空手団体のはずです。多分…

夏祭り（前書き）

「メデイーなし・ド・トネタ！」

夏祭り

八月の初旬。

毎年恒例の夏祭り。

いつもは閑散とした商店街も、その日だけは活気こみち溢れる。

夕暮れから始まる祭りは、各地区から神輿が集結、商店街の突き当たりにある神社まで練り歩く。

僕が中学校3年生の時でございました。

長らく胸に秘めていた想いがございました。夏の開放感、熱にあてられていました。時期尚早ではございましたが、

「今年の夏祭りの日に告白しよう!」

と考えたわけでござります。

その子はアコさんと云いまして、背は小さくて可愛いらしこ子でございました。周りでは、ぶりつ子との批判的な意見もありましたが僕には関係ないわけで…

で、アコさんの家は商店街沿いにあって、祭りには絶対顔を出すのです。そこで僕は考えました。

俺、神輿つる! そんでもって中学生なのに酒呑む! イコール、カッコイイ! そんな俺告白! といった流れです。

実際、当田もその予定通り順調にいきました。

とうとう、告白タイムです。

神輿にはちょくちょく休憩があり、最後の休憩ポイントで想いを伝えることにしました。この休憩ポイントで告白出来なければ、神社でファイナーレなので神輿を離れる時間はありません。僕に『えられた時間は休憩の10分間です。

最後の休憩が始まると、酔っ払いのおっさんに、お前も飲め！と頂いたぬつるい缶ビールをダラダラと零しながら一気に飲み干して彼女の元に向かいました。

彼女はフランクフルトの屋台の前に届ました。僕は喧騒に搔き消されないように声を張り話しかけました。

僕は戸惑いやビビりでなかなか、告白出来ず他愛もない話に。はっぴ似合つてゐ、中学生でお酒飲んじゃいけないよ、などなど。彼女と交わす話は楽しくて幸せで…

気が付けば、もう残り5分もない。伝える時が来たようだ。しかし僕が言葉を出しかけた時だった。

「おい！楽しんでる？」

わざと俺にビールをくれたおっさんだ。顔は真っ赤で目も虚ろ、舌も上手く回つていない。こんな時に思わぬ邪魔が…おっさんは固まつている僕に対して話を続けた。

「おい！なんか奢つてやる！お嬢ちゃんも！何がいい！？」

断つたが、いいじゃないか！タダだよ！タダ！と言つたので押し問答で時間を割くより、手つ取り早く奢つてもらいオサラバすることにした。

「んーじゃあフランクフルトで…」

すぐ近くあつたので何気なくフランクフルトをチョイス。アコちゃんも僕に合わせフランクフルトにした。

しかし、フランクフルトを選んだのが間違いだつた。

フランクフルトと聞き、おっさんの両の目が色を変えた。

僕たちは、

おっさんのスイッチを入れてしまったのだ…

つづく

夏祭り2（前書き）

直球の下ネタ話です。

おっさんは雰囲気がガラッと変わる感じがした。アコちゃんがフランクフルトを食べているのをニヤニヤしながら見ている。

食べ終わり、『J駆走様です、ありがとうございました。』と言つて僕はおっさんに背を向けた。嫌な予感はしたが、そんなもん無視で告白だ。時間がない！

しかし、おっさんはいきなり僕に後ろから抱き着いてきた。アコちゃんはポカンとしていた。僕は状況が飲み込めず、キヨトンとしてしまつた。何かおっさんが言つているが混乱で耳に入つてこない。俺は数秒の間にいろいろと考え結論を出した。ゲイの方なのかな？

おっさんは、君可愛い顔してるねーと耳元で囁いた。僕は悪寒を感じにはいられなかつた。おっさんを振りほどき、おっさんと向かいあつた。今更ながら、気持ち悪いおっさんだ。

しかし、おっさんは素早い身のこなしで僕の横に付き、肩に腕をかけてきた。おっさんは力任せに僕の顔を引き付けた。おっさんはアコちゃんをチラチラ見ながら言つた。俺だけに聞こえる声で。

「お前は穴があつたら入りたいか？」
「どうゆうこと？」

「俺も若い頃は穴があつたら、どんなのでも入りたかつたなあーハハハッ」
「うん？」

「お前はまだ入つてないか？」

ああーまさか…

「男は大好きやからなあ！お前も入れたいやろ！？穴があらやあ！」
入れるつて言つちやつてるじゃん…引き攣つた笑顔で返す俺。

「まだ早過ぎたか！？お前はこの子にあれか？入れ…入りつ…ハツハツ」

おい…おい…

「ええーぞおー穴は…！」

勘弁してよ…もう無理…

氣色わるい…！

「おつ時間だ！休憩終了だ！戻んないと」

実際に時間的にもやばかったので、アコちゃんには、じゃあねとだけ言つて俺は逃げるよつにその場を離れた。アコちゃんは苦笑いしながら手を振つていた。

結局、セツ〇ス大好きジジイ（ストレートな表現ですいませーん！）
のせいで告白できなかつた。

その後、アコちゃんには最後まで告白しなかつたものの、間接的にフラれたので告白しなくてよかつたと思つた。

おつさんの後日談としては高校生になりコンビニのバイトを始めてから、ちょくちょく店におつさんが来ることがあつた。常連のようだ。あの日は酒で顔が真つ赤だと思っていたが、いつでも顔は赤かつた。

以上でーす。読んで損したつて？
知らんわ！そんなこと！

暇でしたので…（繪書も）

ブログ書いてる気分です。

暇でしたので…

俺のお隣りさんはクレイジー揃いだ。

東側の家の松田さん（仮名）。

松田さんは40代後半で3人家族の大黒柱だ。

昼間は、ピシッとスーツを着こなし、さだまさしみたいな眼鏡をかけ、髪型はポマードたっぷりの七三分け。まあ俗に言うリーマン。しかし夜の顔がある。豆電球だけ燈した部屋で彼は狂喜乱舞する。野球中継…彼の至福の一時だ。

酒を飲み気持ちを高め、メガホンを近所迷惑無視で強打！強打！そして奇声を発して応援。

なにより凄いのは彼に境界がないことだ。

セ・リーグ、パ・リーグ、はたまたメジャー。

彼は応援する。両チーム応援する時もある。ある時は、イチローのみ応援していた。ピンポイント応援だ。

そんな松田さん（仮名）の奇声ランキングベスト5…！

5位！

「かあ！ねえーもと…！」

多分、金本選手だと思つ。

4位！

「アアーーーー！」

ベタな感じですね。語尾は下がり気味。

3位！

「おーい！」

呼びかけてますね。

2位！

「いけえ——つ！！」

まあベタです。だいたいの場合、行け！のけの辺りから声が裏返ります。

歓喜の叫びです。

ランク外では…

曾子曰

多分 イチロー 何故かイチローの場合には声を低くします
呼び方のイントネーションにこだわりがあるみたいですね。

以上です。

あと西側の人は

なんか面倒臭くなってきたのでサッケリといいますね。

痴呆のおじいちゃんで戦前の話を永遠します。しかし、おじいちゃんは戦争に参加したわけでも、ましてや徴兵さえされません。唯一、B29が頭上を飛んで行つたってゆう話を永遠します。空爆とかされたわけじゃなく飛んでつただけ話を毎回。

あと先のおじいさんは…

ザックリいいます。

ここからで一軒だけのラブホテルのオーナーです。と聞いていたのですが、最近デマと知りました。

えっと後は……いないです。

よくよく考えると、クレイジー揃いじゃないみたいですね。

なんかすいません。
申し訳ないと思つてませんがね。

澄んだ瞳のロンリーウルフふあみです。

先日、6歳になる親戚の子にプリキュアについて教えてもらいました。

なので今日は皆さんにもプリキュアがなんたるかをお教えしますよ。

プリキュアってのは日曜の朝っぱらにやっているアニメーションですが私は見たことがございません。

で概要是、数名の女の子が悪い奴と戦います。女の子の名前はレモネードとか、甘味系らしいです。

あと何にかペット？守護神？のような生き物が各人に一匹ずつあてがわれるみたいです。

まあ簡潔にいうと恋とか友情とか、なんやかんやをじりじりと詰め込んだスウィートホンター泰メメントアニメなんです。

これで規定の600文字に達するはずなのでプリキュアについては終了です。

んで本題です。

いきなりでは、ありますか…今回をもちまして「ふあみの生き方」完結といつことにさせて頂きます。

ちょっと読んでいた方々も、ひとつふり読んでいた方々も、すつとばして最後から読んでみたあなたも、まつひととありがとひれこいやしました。

基本、ノンフィクションなのでネタが尽されるのは至極重大な問題で、

つねづね苦惱しておりましたが、もう無理です。面白やうなネタが
ありません。

といつわけで、バイバイです。

なので、出来れば皆さんにこの作品の総評としてレビューして頂き
たい。つまらん、カス…なんでもよろしくです。ふあみと付き合
たい！みたいなのも全然有りです。

つまらん締めはこの程度にして…

それでは、さよなら。

そして、ありがとう。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8527a/>

ふあみの生き方

2010年10月28日08時19分発行